

## リスクのモノサシ

なかやち かずや  
帝塚山大学 中谷内 一也

米国の National Research Council が “ Improving Risk Communication ” を発表し、一般市民と政府、企業、専門家間で情報を交換・共有しながら、リスクマネジメントを進めるべきとの指針を示したのが 1989 年であった。その邦訳「リスクコミュニケーション 前進への提言 (林・関沢監訳)」が発行されてからでも、すでに 10 年が経過している。また、問題となるリスクが「あるか・ないか」ではなく、どの程度のリスクであるのかという定量的な判断が重要であることもこれまで強調されてきた。ところが、リスクコミュニケーションを通じて、化学物質の健康影響や環境影響についての定量的な認識の共有が進められてきたかという、必ずしもそうは感じられない。PRTR に代表されるような情報開示制度が整えられ、そこでは定量的なデータの把握、公表が行われているにもかかわらず、である。なぜだろうか。考えられる一つの理由は、一般市民が最もよく利用する情報源であるマスメディアの表現が、ある化学物質の濃度が環境基準を超えたか・超えていないか、ある食品に発ガン性があるか・ないか、という具合に、定性的であることが多いから、というものである。確かに、リスク情報の伝達に関してはマスメディアの表現方法に問題があると指摘する論者も多く、筆者もその 1 人である。しかし、マスメディアひとりに定量的な認識の共有がうまくいっていないすべての責任を押しつけるのは間違っているだろう。なぜなら、マスメディアにとっての情報源である専門家から、定性的な報道を導くようなかたちで情報が発せられることも少なくないからである。そして、何よりも忘れてはいけないのは、リスク情報を受けとめる人々の “ ところ ” がただの白板ではなく、いくつかの心理学的な傾向をもつということである。定量的なリスク判断の共有を促進するためには、マスメディアに責任を押しつけ、専門家にしか理解できない定量的なリスク情報を開示するだけでは不十分である。人々のリスク認知の特質を踏まえた上での、リスク情報共有のための具体的な工夫が必要と思われる。その工夫が進んでいないがために、人々のリスクに対する定量的な姿勢がなかなか成熟しないのではないだろうか。

以上の点を踏まえ、本報告では、まず、人々の直感的なリスク情報処理に関する、いくつかの心理学的な傾向を紹介する。それに続いて、定量的なリスク情報共有に向けた工夫の一環として、「リスク比較セット」という、社会的なリスクのモノサシの利用を提案し、その基本的な考えやねらいを紹介する。